「問い」とともに歩む

永田佳之

教科書には質問が用意されていて、おのずと正答が求められる――そんなスタイルが授業で定着してきました。ところが、グローバル化した現代社会を生きる若者たちはむしろ〈答えのない問い〉に出会う場面が増えています。予期せぬ事態に直面してもあたふたせず、人生の舵取りをできるようにする――今回の国語教科書で新設されたSDGs教材には、こうした時代の要請に応答しようという意図があります。

一年生から三年生まで、持続可能な未来を目ざすSDGsならではの体系、すなわち持続可能な環境や社会・経済と関連づけながら学びが展開されるように工夫がなされています。一年次では自然界のできごとに注目し、二年次では人間界の諸課題に焦点を当て、三年次ではより大きな視座から持続可能性を考察するという工夫です。その中に織り込まれた〈答えのない問い〉を仲間と話し合い、自身の中で深め、「問い」とともに歩んでいく――こうした営みを三年間の学びを通して持続させることによって、まさに「主体的・対話的で深い学び」は実現される端緒を見いだすのではないでしょうか。

永田佳之（ながたよしゆき）
聖心女子大学教授。聖心女子大学グローバル共生研究所副所長。
「持続可能な開発のための環境教育」政府間会議「持続可能な未来に向けた 今日の教育」宣言（Tbilisi+35）のための専門委員会 専門委員、ユネスコ本部「ユネスコ／日本 ESD賞」国際選考委員会委員、アジア学院評議員、フリースペースたまりば理事などを歴任。
著書に『気候変動の時代を生きる』などがある。

SDGsを国語科の視点で

総合（SDGs）教材の構成

ユネスコ「21世紀教育国際委員会」による学習の四本柱を踏まえ「問い」を設定

- 「知ることを学ぶ」(learning to know)
- 「なすことを学ぶ」(learning to do)
- 「ともに生きることを学ぶ」(learning to live together)
- 「人間として生きることを学ぶ」(learning to be)

1年「プロローグ」から3年「エピローグ」まで全学年で展開
3学年の〈学びの旅〉をとおして「問い」と向き合う
卒業後も〈学びの旅〉は続いていく

正解のない問いと向き合い、対話を通じて「最適解」を導く

予測困難な時代を「問い」とともに 生きる ――よりよい未来を創るために

末吉里花先生メッセージ

地球は一つ，でも世界は広いです。いろいろな人たちがいます。そういった多様性を大切にしながら，世界に目を向けて，自分たちが暮らす日本，地域，学校の中，家庭の中，そういったところにも目を向けながら，皆が幸せになっていくような社会はどうやったら作っていけるのか，ぜひ考えてください。

皆さんは変化を生み出すことができる人たちです。何かをやらなければ問題の一部になってしまうかもしれませんが，何かに関わって頑張ってやっていこうとすれば，皆さんは問題を解決する一部になれます。

みんなで一緒に変化の担い手になっていきましょう。

Be the change !

末吉里花

1年　P76
「人の暮らし方を考える」

プロローグ――〈学びの旅〉へ
『「エシカル」に生きよう』　末吉里花

ロバート キャンベル

2年　P94
「不平等のない社会を考える」

『「ここにいる」を言う意味』　ロバート キャンベル
『一〇〇年後のみなさんへ』　緒方貞子

福岡伸一

3年　P220
「人間の生命・存在を考える」

『生命とは何か』　福岡伸一
『地球は死にかかっている』　手塚治虫
『水の星』　茨木のり子
エピローグ―― 再び〈学びの旅〉へ

オリンピック・パラリンピック招致会議でのプレゼンテーションの様子

優勝した，日本トライアスロン選手権パラトライアスロン・デモンストレーション（2017年　東京都港区）

谷真海　選手　2年 P72『夢を跳ぶ』

フェデラー選手と

「世界一」といわれるバックハンド

国枝慎吾　選手　3年 P308『言葉でつかんだ世界一』

東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会持続可能性コンセプト

日本は，気候変動や天然資源の枯渇，差別等の人権問題等，持続可能性に関する世界共通の課題に直面しています。

東京 2020 大会は，「Be better, together ／より良い未来へ，ともに進もう。」をコンセプトとし，持続可能な社会の実現に向け，課題解決のモデルを国内外に示していきます。

また，地球及び人間の未来を見据え，国連の「持続可能な開発目標（SDGs）」に貢献するとともに，将来の大会や国内外に広く継承されるよう取り組んでいきます。